アートギャラリー

白　磁
＝SODEISHA＝

石　田　成　昭



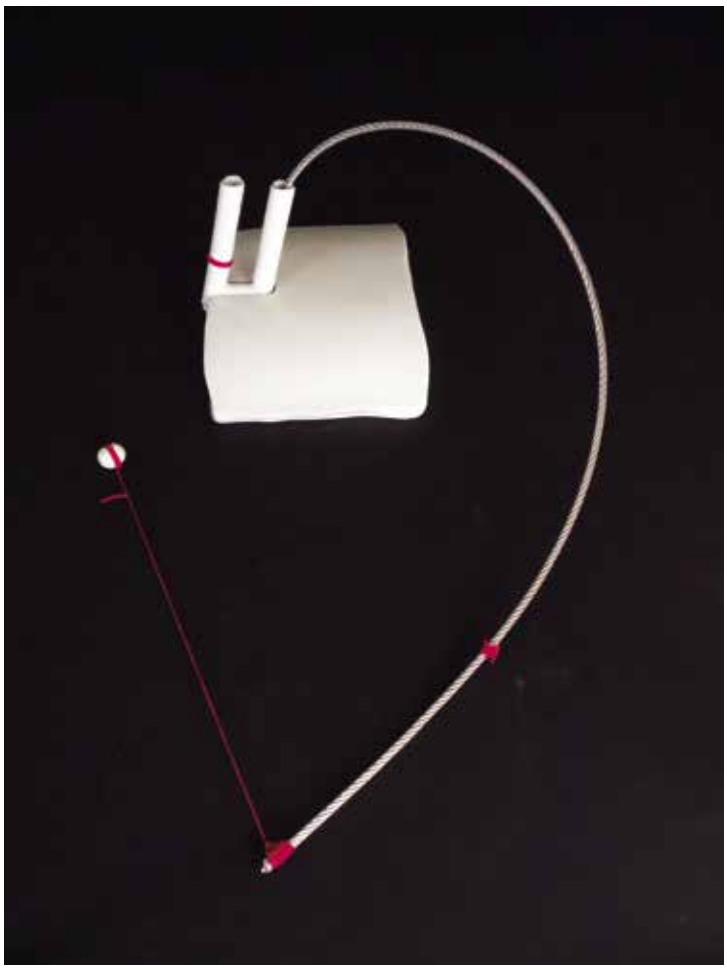
奈野６０９　高 25cm

―ＳＯＤＥＩＳＨＡ―

1979年、吾が師・八木一夫がこの世を去った。今年で丁度40年になる。同年前衛陶芸集団・走泥社がオーストラリアのニューカッスル美術館で走泥社展を開催した。終了後それはオーストラリア各地を巡回し大きなインパクトを与え、後々のオーストラリア現代陶芸に少なからず影響を及ぼしたと云う。今回その後の40年を検証することを兼ね、3月から5月にかけ同美術館で記念展（SODEISHA connected to AUSTRALIA）が開催された。出品者はオーストラリア、日本各5名と旧走泥社メンバーである。図らずも私も5名の内の1人として参加する事となり、2018ギャラリーマロニエ個展作品3点を出品した。開会式典には日本の大使も出席され500人もの来場者で大いに盛り上がったと云う。赤道を越え走泥社が蒔いた種が大きく育ち日豪親善交流の一端を担えた事は私にとっても誠に幸せな事であった。さて今回の記念展で一番驚いた事は（図録の写真を見ての話しだが）旧走泥社メンバーの作品が40年の歳月にも関わらず色褪せる事も無く初々しく光り輝いていた事だ。美とは不思議なもので良いものは年月を経る事でより美しくなる様である。

八木の死は突然でその後の日本の陶芸界も様変わりを余儀なくされたが、私にとっても大きな転換点となった。近大文芸論集第14巻第1号に記した八木の意外なユイゴンを私はこの40年間片時も忘れたことがないが、今回の展覧会の出品は八木が呼び寄せてくれた様に思えてならない。師匠と同じ会場に作品が並ぶのは弟子の端くれとして大変光栄な事と感謝している。私は京都市立芸大の学生として1年、その後助手として7年八木の側にいたが、その間作品制作は云うに及ばず陶芸界での生き方、茶碗屋の心構えなど数多くのことを学ばせて頂いた。あれやこれやと考えつつこの40年を振り返ると、自分の成した一番の≪作品≫は25年前に作品番号の頭に“奈野”という言葉を付けた事だろう。この事については文芸論集第27巻第2号に記したが、作品は小さい方が良いと今も確信している。そして『見て美しく使って楽しい』という一昔前の工芸観を拠り所に『手に触れて遊ぶ・遊べるように作る・遊んで見せる』をモットーに試行錯誤している。遊びをせんとや生まれけん。後もう少しだけ続けたく思っている。

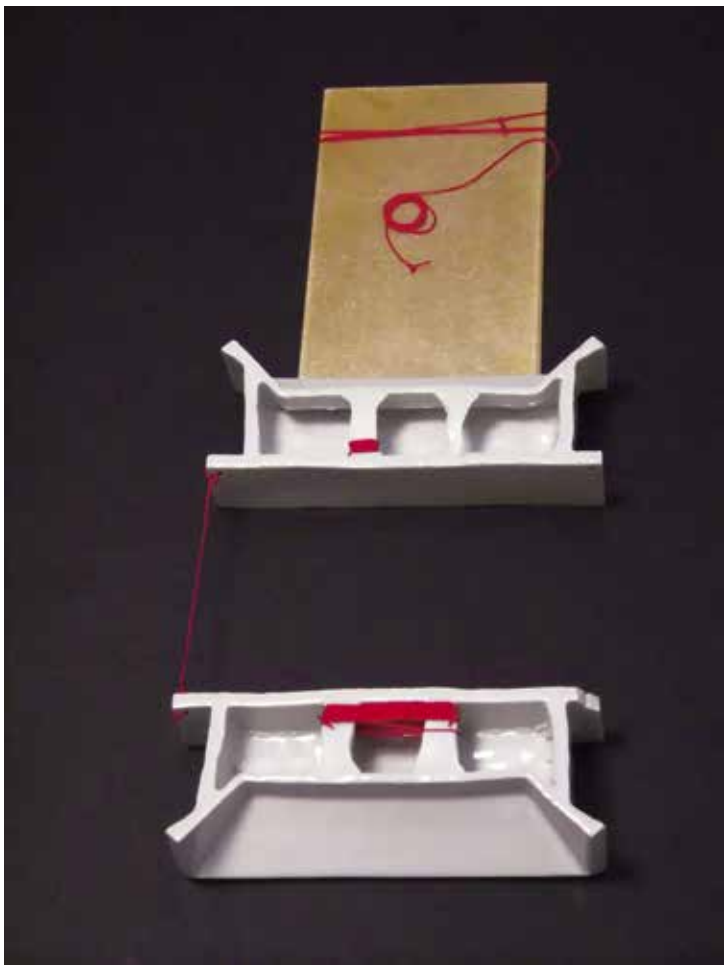
授かりし　遺言胸に　40年
追う夢なかば　此の名の白磁



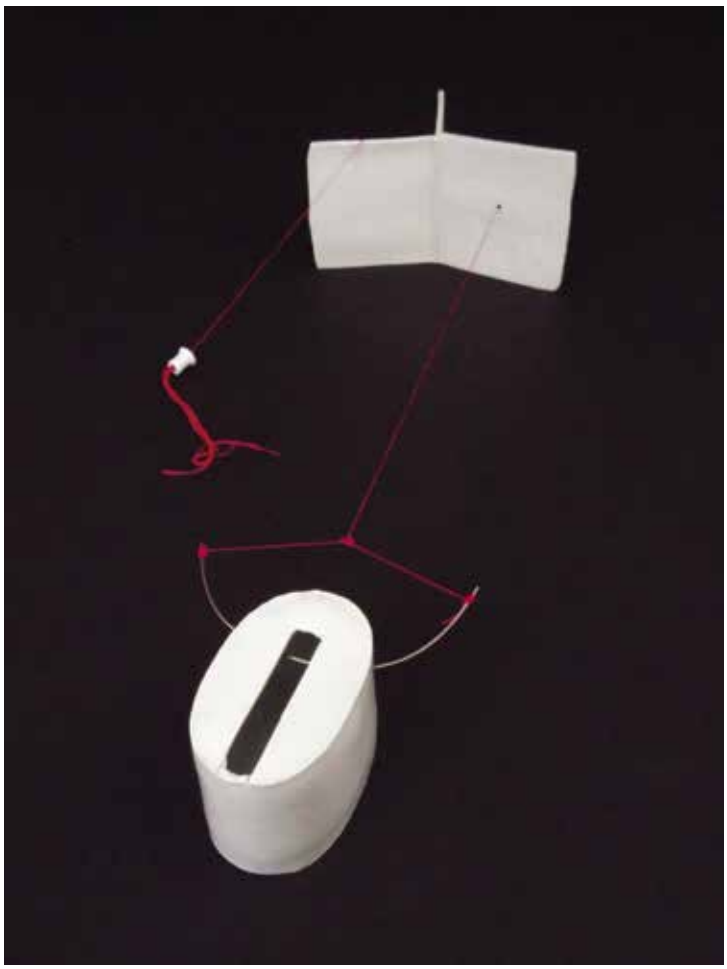
奈野６１９　高 23cm



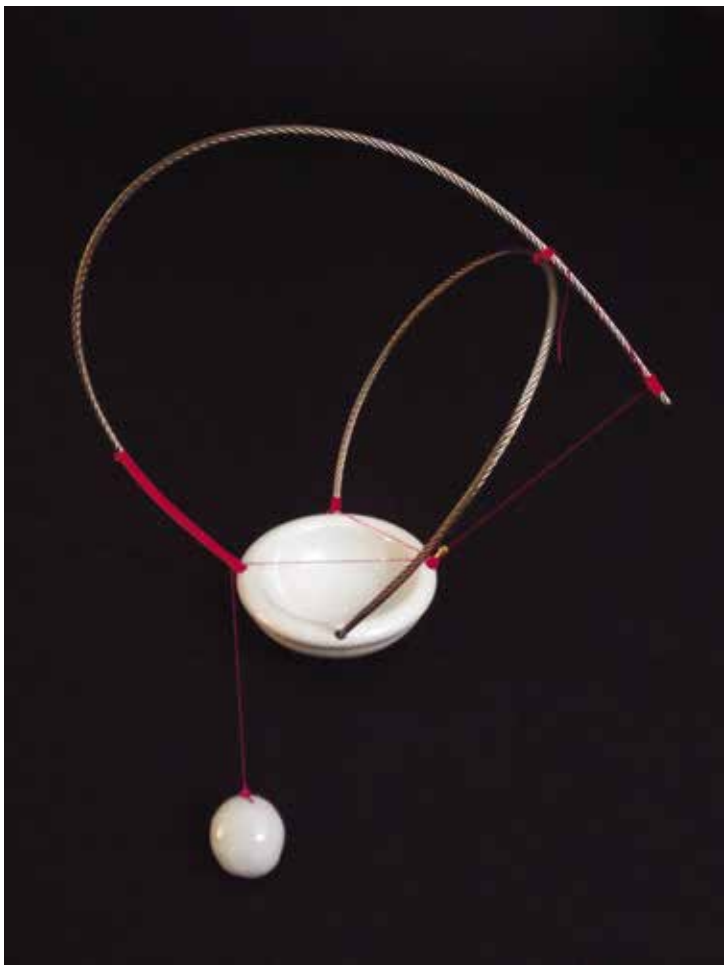
奈野６０８　高 13cm



奈野６１５　　高 6cm



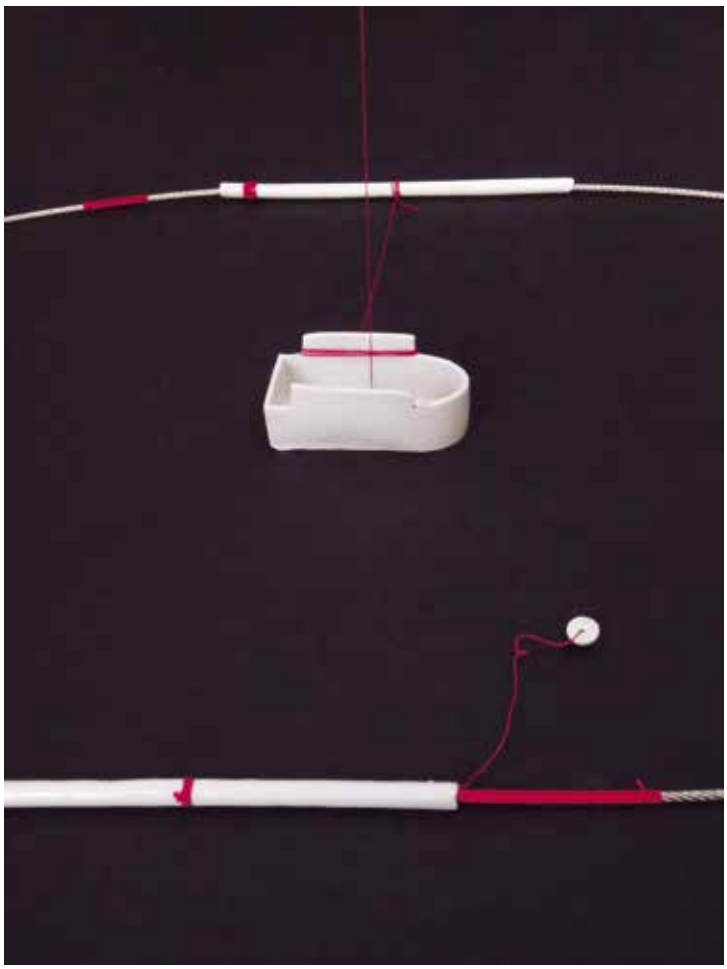
奈野 6 1 1　高 18cm



奈野６１０　高 39cm



奈野 6 1 3　高 29cm



奈野６２１　　高 7cm